
旅のはじまり

雪墨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅のはじまり

【著者名】

NZマーク

【作者名】 雪雲

【あらすじ】

15歳の少女が旅に出る。

ポケモンの世界では珍しい年齢の新米トレーナー。

彼女はカントーに住む祖父の元を訪ねようとクチバ港を出発して森をさまよっていた。

森の中を駆ける一頭の影があつた。大型の大きなポケモン、ただ背には不釣合いな大きなこぶができていた。それが人間の年端もいかぬ少女だということがわかつたのは、木の上からのんきに見下ろすホーホーくらいなものだろう。

生い茂る木々は深い闇を作り、月夜の光さえわずかにしか通さない。そんな闇の中でさえその影の瞳は色あせず映えていた。深い漆黒の瞳は、それなりのトレーナーが見ればワインディの瞳だと解ったかもしない。だけれども、その背に乗り必死に身を低くしげみつき、うめき声をもらすような新米トレーナーにはきっとわからぬのだろうなあ。と、歳を経たワインディはそう思つていたのだ。

旅人なら食事を終えて寝床の準備をする・・・そんな時間だった。

「うう・・・」

背に乗る人間が、そんなうめき声を上げるたびにワインディは情けないなあとと思うのだが、当の人間はどう呼吸をやりくりしようか本気で必死だつた。

まあ、それも仕方が無い。先月15歳になつたばかりで、人間としては一端に認められてくる頃だが・・・トレーナーとしては一ヶ月、旅人としては一週間足らずの新米なのだ。むしろ、旅を始めたばかりの少女が一週間もこのポケモンの足を使わなかつたのが健氣と言えるのだから・・・。

「ま、町はまだ・・・」

何度目かの呟き。その声は向かい風にすぐにかき消されるのだが、賢いポケモンの耳は酷く少女の疲弊した声色を聞き分けていた。

少女はシンオウ育ちで、とりわけ寒い地方に住んでいたため寒さ

には慣れていたつもりだった。

季節は春。だが、夜だ。昼間は汗ばむような陽気でも、日が落ちればあつとゆうまに気温は下がる。

歩いて肌で感じる微風と、駿足で知られるポケモンの背に乗り夜風の疾風にさらされるとでは訳が違う。寒さというのは、それだけで少女のなけなしの体力を削っていく。

「ワオオオオオオオオン」

少女の耳には随分と風を切る音しか聞こえていなかつたが、その森を切り裂くような遠吠えは違つた。「なに、なに?」とあわてふためき辺りを見渡すが、人間の目には葉の間から微かに零れる月明かりしか捉えられない。

ウインディとしは歩みを止める合図のつもりだつたのだが、少女がそれを察するには二人の関係はまだ少女が旅を始めたくらいに幼かつたのだ。

それを合図に、ウインディの速度は落ちていき・・・完全に止まつたところで、少女は自然と漏れた安堵のため息と共に背からずり落ちた。

少女は祖父から送られたポケモンを信頼していた。だが、めまぐるしく変わる景色の中で闇だけが動いていくのは少女にとって始めての経験。いつ振り落とされるとも限らない荒々しい躍動の中を叫び声ひとつあげずに乗り切つたのは、恐怖の中叫び声をあげるのも忘れ心が麻痺しただけの話だつた。その始めての経験は、心臓の高鳴りと冷えた体が少し遅れて少女の記憶に送り届けた。

それでも乗りこなしたことに素直に感心したウインディは、それをねぎらつてやろうと新しい主人の横にドンと座り、ゆっくりと口元を彼女の顔に近づけていった。

いきなり頬をつたつたワインディの舌は、唾液たっぷりで本来ならなら気持ち悪いはずなのに・・・なぜか心をホツとさせた。

「ちょ、と・・・くすぐったい」

手ではらいのけようとすると、冷えた腕はうまく動かない。

だけれど、舌が触れた部分からじわりと伝わってきた熱が何故かとても心地よく感じられて・・・これでもいいかな・・・と、そんなことを思つてしまつた。

「ふはあ・・・」

「ぐるう・・・」

共に発したため息は、次第に笑い声と変わつていつたのだ。

それからほんの少しの間、互いの関係をうめむよひじやられ合つて・・・

今日のことがぼんやりと頭を過ぎつた・・・

「あ、ポケモンセンター・・・」

ゆつくりと起き上がりライトを付ける。

闇の中に頼りない光が生まれ、微かに森がざわめいた気がした。

それで、進むべき道を照らしてみる。小さな懐中電灯なので遠くは照らせないが、目に映るのは森の中の一本道。町なんて見えはしない。

「おかしい・・・おかしいよ。そ�は思わない?ねえ、ワインディ」
「ワインディには何がおかしいのかわからなかつたけど、とりあえずうなづく様に鳴き声をあげてみた。

「クチバシティで聞いたら一週間で着くつて言つていたの、今日がその一週間目!」

興奮してきたのか次第に少女の声は大きくなつていつた。

「道が分かれる度に確認したし、ちゃんと一週間数えたわ」

少女は自信満々に言い張る、ワインディはあきれる様に小声でうなづいた。

実は朝からこんな調子なのだ。この話も、多少手では足りないくらい話しただろう。

そして最後はこうしめられる・・・

「まずはお風呂、美味しいご飯も食べたいし・・・硬い地面はもういや・・・」

最後はしゅんとして、下を向いてしまった。

ワインディとしても、そろそろ主人を休ませてあげたいと思つた。本当の主人からも守つてやつてくれと頼まれたし、傍目から見ても少女は頑張つていた・・・それはまじめ過ぎるくらいに・・・。

「さあ、ワインディ。行くわよ」

そう言つと勢いよく立ち上がつた。よう見えた。

「痛つ！――」

どてん、そんな音の後にそんな声が勢い良くあがる。

ワインディは思わず呆れるように首を横に振つてしまつた。

少女は自分が始めた旅だから、そう言つてこの一週間ずっと自分の足で歩いていた。

他の旅人から比べたらそれはずつと多い回数休んだし、愚痴の数なんか酷かつた。

自分を頼ればいいのに、そう思うこともあつたが主人のがんばりを無駄にはしないと彼女の口から頼まれるまでじつと待つた。

そして今日、日が落ちてからやつと少女は自分を頼つてきたのだ。だからこそ、町まで行つてあげたい・・・けど・・・。

「グルウ」

ワインディは無理だと言わんばかりのじぐさをした。少女にもそれが伝わつたはずだ。

それでも、少女の落胆は隠せない。

「ワインディの馬鹿・・・」

そう小さくつぶやいて、少し涙ぐんでしまつ。

「ウルウ・・・」

ほんの少しの間、沈黙が流れた。

「馬鹿・・・」

少女もワインディーのことを責めても仕方ないことぐらいわかつていた。けど、どうしようもない怒りのよくなものを吐き出したかった。

そしてワインディーも、少女が幼いことも経験が足りないこともわかつっていた。そして少女が何か言つたびに「ウルウ」とあいづちを優しく返してあげた。

「ぐるぐるぐるぐるう～」という巨大な腹の根で、少女は目を覚ました。時間にしたら20分も経っていないだろう。一通り悪態をついた後、ぱたりと寝てしまったのだ。

「お腹空いた、ワインディー？」

目蓋を『じ』じと擦りながら、眠そうな声で主人が尋ねる。

「グルウ」

ちょっと恥ずかしそうにワインディーは答えた。これでも なのだ、恥じらいくらいポケモンも持ち合わせている。

「暖かい・・・」

少女は起き上がってから周りが明るいことに気がついた。

ワインディーは少女を起こさないよう、そつと薪を集めては得意の火の粉で焚き木を作っていたのだ。

「さて、『ご飯にしよつか』

軽く背伸びをして、少女は勢いよく立ち上がる。少し寝るだけで身体は嘘のように軽くなるものだ。そうは言つても、勢いは最初だけで徐々に痛みが回つてくる。次第にゆるやかになる動作をワインディーは静かに見守つていた。

そして、旅荷用のボールを取り出しては不慣れな手つきで得意の料

理を始める。といつても、粉の出汁を溶かしたお湯に干し肉や道中で見つけたキノコ類を入れたり、格安で買えるトレーーナー用の缶詰やレトルト食品を温めたりする程度のことなのだが……それでも、少女の中では驚くほど手際が上達していると感じているのだ。

出来上がったところで、腰の一つのモンスター・ボールを取り出す。「『飯は皆で食べたほうが美味しい』とは、前のマスターの口癖だつた。それは、どんな人でも一緒だと思うのだが、何故かワインディイは前の主人のことを思い出して微笑んだ。

一人と二匹で固まつて横になっている。

それはもう寝苦しいのではないかというばかりに引っ付いている。ただ、その肌と肌が触れ合つた部分がほんのり熱く、とてもかけがえのないものに感じられたのは、きっと皆一緒に思つ。

揺らめく炎も消え、炭になろうとしている赤い塊を宝石のように綺麗なものだと少女は思った。微かに明るい程度……けど、森の輪郭ははつきりと見て取れた。

どこから聞こえてくるホー・ホーの鳴き声が、頭の中にじんわりと浸透してくる。

「私、こうやって皆の寝るのとつても好きよ」

それに続いて、鳴き声が三つつながる。

「おやすみ、みんな・・・」

そういうと、少女はすぐに寝てしまった。

「旅にてよかつた・・・」

そう、咳きながら。

彼女の旅はまだ始まつたばかりなのだから。

(後書き)

一年程前に書いた作品です。

以前から何かしら創作物を作つてみたいたいなと思っていたのですが、投稿する機会がなくこのサイトを知つて衝動的に上げてしましました。

拙い文章ですが楽しんでもらえたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1053m/>

旅のはじまり

2010年12月17日17時57分発行